

「応援」

おはようございます。

今日は「応援」という話をします。私は、先週の金曜日に全日本音楽教育研究会中学校部会の総会の司会者として出席してきました。その総会では、北は北海道から南は鹿児島まで42支部中、約20人の支部の支部長が集まり様々な報告がありました。その中には、岩手県や宮城県、福島県の支部長の先生もいました。東日本大震災で地震・津波・放射能の大きな被害を受け、亡くなられたり行方不明であったり、未だ避難所生活を送っている人がご自身の学校の生徒や先生、またその生徒たちの両親や兄弟姉妹がいる報告もありました。

総会の後、直接その先生方に話を聞きましたが、それはテレビや新聞でも報道された以上に壮絶なものでした。朝日新聞では、津波の後の瓦礫の中で、親が行方不明となっている吹奏楽部の中学生がトランペットで涙ながらにZARDの「負けないで」を吹く写真とその様子がありましたが、三ヶ月以上が過ぎ、未だに行方不明な両親を探している児童や生徒がいるそうです。私の知り合いもボランティアで気仙沼に出かけた人がいましたが、瓦礫と化してしまった場所を片付けていると「おじさん、僕のお父さんをいっしょに捜してよ」と右手の袖を引っ張り声をかけてくる男子小学生がいて、慰めの言葉も出ず涙だけが溢れて止まらなかったと話してくれました。現在、被災地には日本各地また世界中からたくさんの義援金や物資、そして多くの励ましの手紙が届くようになり、道路や仮設住宅も徐々に整備されてきています。そのような中で、九州のある中学校の生徒たちは、自分たちも何かできないかと考え、被災した学校へ応援の気持ちを込めて、全校生徒が合唱している様子をDVDに撮って千羽鶴といっしょに送ったり、また、東京では中学校を卒業した人たちに呼びかけ使わなくなったアルトリコーダーや鍵盤ハーモニカを送ったりしています。また、総会の閉会のあいさつで、宮城県支部長の先生は、「多くの先生や子どもたちは、マイナスの状態からゼロの状態に戻そうとみんなで励まし合い必死にがんばっている」と言っていました。

また、これは、昨日26日日曜日の読売新聞の記事です。被災した宮城県内の小・中・高校では、多くの先生方が亡くなったため授業ができない状況を回避するために全国各地から駆けつけた「応援の先生」が教壇に立っています。東京都からも約70名の先生方が志願して現地に入り、過酷な体験を経て前を向き始めた子どもと、復興のために全力を尽くそうとする先生が教室でグラウンドで日々向き合っている様子が一面に紹介されています。墨田区の外出小学校の鵜沢先生、また、隣の台東区桜橋中学校の体育の矢部先生など身近な先生も学校に笑顔を取り戻させようとがんばっています。

先週は、小笠原諸島や岩手県平泉が世界遺産に登録されるという、うれしいニュースも流れてきています。東京では、余震も少なくなり3月11日のあの状況から月日が経つうちに、記憶の中からも薄れてきている人も多いかもしれませんが、ゼロの状況にももどそうと必死にがんばっている現地の人やその協力をしている人たちがたくさんいることを忘れないでほしいと思います。私たちがボランティアとしてできること、また、夏の節電にも向けて日本国民の一人として考え行動していきましょう。